



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大規模畑作地帯における農家の生活構造（第1報）：生活時間の経営形態別検討
Author(s)	松木, 靖; 吉野, 宣彦; 安延, 久美
Citation	農業経営研究, 16, 1-31
Issue Date	1990-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36467
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_1-32.pdf



大規模畑作地帯における 農家の生活構造（第1報）

－生活時間の経営形態別検討－

松木 靖
吉野 宣彦
安延 久美

目 次：

1. 問題の所在と研究方法
 - 1) 問題の所在
 - 2) 本稿の課題
 - 3) 生活時間調査の方法
 - 4) 生活時間の分析方法
2. 農業経営形態と生活時間構成
 - 1) 男子の生活時間構成
 - 2) 女子の生活時間構成
 - 3) 生活時間構成の特徴と問題点
3. 生活時間構成の季節変動
 - 1) 生活時間の変動性と相互関係
 - 2) 生活時間の季節的類型
- 補. 睡眠時間の季節性
4. 生活時間からみた農家・農村生活の課題
 - 1) 分析の要約
 - 2) 大規模畑作地帯における農家生活の問題点

1. 問題の所在と研究方法

1) 問題の所在

近年、農業を巡る諸環境は内外共に厳しさを増しており、それに対応しうる農業経営・地域農業の体質強化が声高に叫ばれている。その際、今後とも農業の担い手として、わが国農業経営の中心的存在である家族経営を想定するならば、農業経営の体質強化は、農業経営と表裏の関係にある農家生活の体質強化をも視野に入れる必要があると思われる。

現実に農家生活のありかたは、農業経営・地域農業の担当主体の欠如という問題を通して、地域農業・農業経営の維持という点で大いに問われている。「基本法農政の優等生」といわれ、急速な規模拡大、「近代化」を遂げた北海道の農家は、物質的にははるかに豊になった。住宅、自動車などの耐久消費財の保有水準は都市勤労者世帯を大きく上回り、かつての「貧しい農村」のイメージはその外見からは一掃されている。家計費水準でも勤労者世帯を超えている。しかし、こうした外見上の生活の豊かさは必ずしも「農家生活の豊かさ」や「農業の魅力」には結び付いていない。

現在、地域農業が抱える問題の一つの局面として、農地移動を取り上げよう。ここでは、かつての様に流動化が進まずに中核農家が規模拡大できないという問題だけではなく、そもそも農地の受け手がいなくて流動化が進まず、耕作放棄地が出現するという状況が、各地で散見されるようになった。農産物価格下落による地代負担力の急速な低下が経済的背景にあるが、地域内の労働力の流出がぎりぎりまで進んだために、そもそも農地の引取り手が存在しなくなっているということも事実である。こうした労働力の流出には幾つかの要因があげられようが、必ずしも農業の所得水準にのみ基づくものではない。

例えば、現在の農地の出し手の多くはいわゆる「高齢農家」であるが、その中には地域内でも一、二を争うような経営も数多くみられる。また、順調な経営軌道に乗っている農家でも経営主の急死や入院、後継者がいきなり家を出てしまったりして、いきなり離農を余儀なくされるというケースが各地で目につくようになった。こうしたケースによる離農は過去にも多かったと思われるが、それが地域農業の大きな問題として表面化してきたのは、その他極に地域農業を守っていく最小限の労働力しか残存していないために、農地の処分が困難になっているためである。前者では明かに健康破壊という局面に、農業経営と農家生活の矛盾が集約されている。

後継者の流出の背景には、後継者自身の「農業の先行きの不安」による判断があるが、一方で、後継者問題を語るときに「息子には農業を継げとは言えない。農業はそんなにいいものではない」という、自らの「生きざま」で否定してしまう多くの経営主の声を耳にする。農業所得の順調な拡大以外に後継者を農家・農村になぎ止めるものはなかったのだという、農業所得の上昇局面では目につかなかった農家生活、農村生活の魅力の乏しさが、現在の環境条件の厳しさのもとで露呈したのではないであろうか。

農業経営問題とは農業経営の「安定的な再生産の確保を阻害し攪乱しつつある中心問題」である¹⁾。一方、家族労働力の再生産の質的内容の問題が農家生活問題であり²⁾、農業経営と農家生活は労働力の再生産に結節点が求められる³⁾。つまり、農家生活問題は、家族経営にあっては、生活主体としての再生産問題であると共に、家族労働力のすなわち農業経営の労働力主体の再生産に関わる問題であるという点で、広い意味で「農業経営問題」であると考えられる。

このような視点に立てば、今後の農業経営の方向を検討するに際しては、担い手である家族労働力の再生産構造を農家生活も含めて視野に入れて、検討する必要がでてこよう。そのためには、農業経営・農家生活両者の関連把握が必要であるが、こうした研究視角は、農村生活研究サイドでは幾つかの試みがなされてきたものの、農業経営研究サイドからの接近は少なく、両者の相互関連は充分意識されてきたとは言いがたい。例えば、経営計画を作成するときに、労働時間の制約条件をどの水準に設定するかという問題一つとっても、明確な指標を持ちえないのが現状であろうし、それに答えうる実態把握も著しく遅れている。「経営の質」を「生活の質」を考慮しながら高めるという課題に対しては、まず両者の関連構造の実態把握が必要である。

2) 本稿の課題

そこで、われわれは上述の問題意識に立って、1987年度より高度経済成長下に選択的規模拡大が典型的に進んだ大規模畑作地帯の一つである、北海道十勝の中札内村を対象として、生活実態調査に取り組んできた⁴⁾。本稿は、そのうちの生活時間調査をもとに、生活時間構造を明かにすることを目的としている。

生活時間時間調査は生活実態把握の第一着手として取り組んだものである。その意図は、年間を通じた生活行動を生活実態の基礎として把握し、その上に生活の諸局面の分析を行うところにある。つまり、健康問題など様々な現象形態を取る農家

生活問題を、生活時間分析によって得られる「生活行動の軌跡」⁵⁾の上に理解し、農業労働の実態を媒介として、農業経営のあり方を検討しようとするものである。

本稿ではその第一報として、農業経営形態別の生活時間構造の分析を行う。生活時間分析は後述のように、大きく3つの形態分類で行っているが、第一着手として、農業経営形態別の分析を試みたのは、次の視角による。

第一に、調査対象とする大規模畑作地帯では、1970年代以降の規模拡大過程で、畑作と酪農を組み合わせた「混同経営」から、畑作と酪農への専門分化が進んだ。従って同地域にあっても、両者の経営内容が大きく異なっており、当然、生活内容およびその抱える問題もまた大きく違っているとみられる。つまり、農業経営形態に固有の生活パターン、そこから引き起こされる生活問題が存在するであろうということである。したがって、両者を混同した分析は農家生活の実態として正確を欠くことになる。

また、どちらか一方に代表させることは、生活問題を特定の農業経営形態の農家生活問題にのみ限定することになり、地域的な広がりをもった農村生活問題としての把握ができなくなるであろう。これが第二点目である。畑作経営、酪農経営が混在している地域での農家の生活面のまとまりを考える場合に、両者の生活パターンの相違は重要である。しかも、畑作経営、酪農経営ともにその資本投下量の大きさからして、一方の形態に転ずることはまず不可能である。したがって農家生活の改善方向は、経営形態ごと示されることになるが、その結果生活内容の固有性がますます強まるならば、地域社会としての農村生活の全体の生活改善にはつながらないであろう。

以下では、上記の視角に基づいて、以下の手順で分析を進めることにする。

第一に、農業経営形態による生活時間構成の違い。第二に、農家の構成時間の相互関連の把握。第三に農家の生活時間の季節変動パターンの把握。第四に、農家の生活時間構成の類型化、である。

3) 生活時間調査の方法

分析に入る前に生活時間調査の方法について述べておこう。生活時間調査は、中札内村北海道畑作経営技術研究所からの委託を機として、取り組んだもので、以下の要領で行った。

(1) 調査の目的

農家の生活時間について①季節的変動、②経営形態別・規模別差異、③家族構成

別差異、④家族間の生活行動関係、⑤非農業世帯との違い⁶⁾、を把握すること。

(2) 調査対象

村内の全農業世帯 269戸と、抽出した非農業世帯30戸を対象とした。農業世帯には農家と共同経営法人の社員、従業員の全員が含まれる⁷⁾。調査対象者は、④の目的から農作業・家事などに一定の関与をもち、かつ調査票記入が可能と思われる、中学生以上の家族員全員とした。

(3) 調査方法

上記 299戸を、2 グループにわけ隔月 1 日の配票調査を行った⁸⁾。グループ分けは、集落を単位とし、全村的なちらばり、経営形態、共同法人世帯数などについて両グループが均質になるように考慮した。

(4) 調査日

1987年10月より1988年10月までの13カ月間で、原則として各月の15日とした。休日と平日による生活時間の違いをなくすために、土曜日・日曜日（祭日）に当たる場合は調査日をずらして平日のみの調査とした。1987年10月調査は、調査方法および調査票検討のための試行調査であり、分析に用いたのは1987年11月～1988年10月の12カ月分である。

(5) 調査票の様式

付図のように、NHK国民生活時間調査票に準じて、1日を15分ずつの96時間帯に分けて記入する様式を用いた⁹⁾。

(6) 経営属性データ

農業経営形態の比較に必要な各経営の属性についてのデータは、1987・88両年の中札内農協「作付実態調査」および「家畜頭数調査」を使用した。

4) 生活時間の分析方法

(1) 生活時間の分類

生活時間の分類方法はこれまでに、いくつか提起されてきたが、付表のように大分類として生理的生活時間・労働時間・社会文化時間の3区分法をとり、さらに中分類、小分類の3段階に分ける、項目設定を行った¹⁰⁾。

(2) 生活時間の集計

生活時間の集計は、農業経営経営形態別・年代別・家族構成別に、先の分類に従って生活時間の時間量の構成を集計した。生活時間の時刻付置については、年代別のみ集計した。

(3) 経営形態の分類

経営形態は、前記農協資料をもとに、畑作と畜産の組合せにより、

畑専・・・商品畑作物のみの作付で、家畜の飼養無し

混同・・・商品畑作物を作付し、家畜の飼養有り

酪農・・・飼料作物のみを作付し、搾乳を行っている

畜専・・・採卵鶏・ブロイラー・豚の専門経営

と4形態に分類した。このうち、畜専経営は戸数が少なかったので農業経営形態別の分析対象から除外し、非農家世帯を加えた4形態が分析対象である。

2. 農業経営形態と生活時間構成

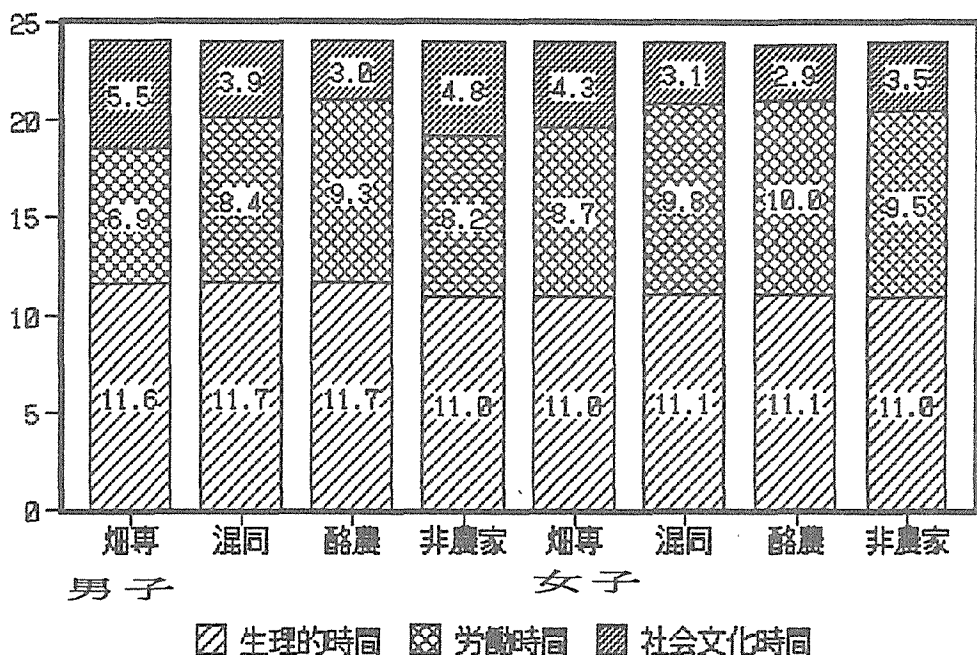
最初に、1年間の平均生活時間構成から農業経営形態別の生活時間の特徴と、非農業世帯と比した農家世帯の生活時間の特徴を検討しておこう。後に検討するように、農家の生活時間構成は農業労働の繁閑に基づく、季節的変動をもっている。したがって、年間平均の生活時間構成は、もとより農家の生活行動をそのままの姿として示すものではない。しかし、季節的な生活時間構成の変動とその類型だけでは、農閑期あるいは農閑期の生活時間構造違いと、その問題点を指摘することはできても、全体としての違いは必ずしも鮮明には捉えられない。年間の平均生活時間構成の時間量の違いと、季節的な変動の内実とあわせることで農業経営形態による生活時間構成の差異をより明瞭に把握しようと思われる。

図1には大分類による生活時間の年間平均構成を、表1には中分類の8項目の構成と小分類による構成の一部を示した。まず、大分類による生活時間構成の違いを検討し、その違いの内実を表1で検討することにしよう。

1) 男子の生活時間構成

(1) 農業経営形態による生活時間構成差

図1で大分類の生活時間構成をみると、男子では農業3形態の生理的時間には差がなく、労働時間と社会文化時間に農業経営形態による違いが確認される。労働時間は、畑専が6.9時間と最も短く、酪農が9.6時間で最長である。その分、畑専の社会文化時間が長く、酪農のそれは長くなっている。混同は、農業経営形態だけでなく、生活時間構成の面でも、畑専・酪農の中間形態を取っていることが確認され



注 1) 生活時間調査による。

2) 表 3 - 1, 2 の月別構成の平均である

図 1 経営形態別の生活時間構成

る。

生理的時間は総量では農業経営形態による差はなかったが、その中分類・小分類の構成には違いがある。まず、就床時間、なかでも睡眠時間は労働時間の長い形態で短くなっており（表 1）、混同・酪農の睡眠時間は 8 時間を割り込んでいる。「これまでの労働科学的知見によると、8 時間以下の睡眠時間が長く続くと、蓄積疲労状態（生理的諸機能の低下、血液比重の低下など）に落ち入ることが明かになっている」¹¹⁾ ことからすると、混同・酪農では慢性的に蓄積疲労状態にあると推察されるのである。逆に、身の回りの時間、中でも休憩時間は労働時間の長い形態ほど長くなっており、短い睡眠を休憩が代替しているとみられる。

酪農には農外労働がないという違いはあるが、労働時間の長さを決定しているのは、主として農業労働である。酪農では農業労働だけで 8 時間を超えており、年間を通じて「長時間労働」の状態におかれている。農業労働の内容をみると、畑専の総労働時間 5.6 時間は、酪農の家畜管理と同水準になっている。酪農の農業労働時

表1 経営形態別にみた生活時間の年間構成

(単位：時間)

			男 子				女 子			
			畑専	混同	酪農	非農家	畑専	混同	酪農	非農家
中 分 類	生理時間	就身の回り	8.7 2.9	7.8 3.9	8.2 3.6	8.6 2.5	8.2 2.9	7.9 3.1	7.9 3.2	8.0 3.1
	労働	農業労働	5.6	6.8	8.8	0.3	3.5	4.9	5.3	1.1
	家事	農外労働 家事	0.7 0.6	0.6 0.9	0.0 0.4	7.4 0.5	0.8 4.4	0.1 4.8	0.2 4.5	3.0 5.2
小 分 類	社会文化	社会的 文化	1.7 3.7	1.5 2.4	0.5 2.5	1.2 3.6	1.1 3.2	0.8 2.3	0.4 2.5	0.8 2.8
	就床時間	睡眠 昼寝 仮眠 療養	8.4 0.3 0.0 0.0	7.6 0.2 0.0 0.0	7.4 0.2 0.1 0.4	8.4 0.1 0.0 0.0	7.8 0.2 0.0 0.3	7.5 0.2 0.0 0.2	7.3 0.2 0.0 0.4	8.0 0.0 0.0 0.0
	身の回り	食事の 身の回 り休憩 受診検 診	1.6 0.7 0.5 0.1	1.5 0.7 1.2 0.3	1.8 0.5 1.2 0.1	1.5 0.7 0.2 0.1	1.5 0.8 0.4 0.2	1.6 0.7 0.7 0.2	1.6 0.7 0.8 0.1	1.6 0.8 0.3 0.4
類	農業労働	圃場作業 屋内作業 家畜管理 経営管理 移動	3.2 1.1 0.0 1.1 0.2	1.5 1.0 3.4 0.8 0.1	1.6 0.7 5.6 0.7 0.2	0.0 0.0 0.0 0.3 0.0	2.6 0.7 0.0 0.2 0.0	1.2 0.7 2.7 0.2 0.0	0.6 0.2 3.9 0.5 0.1	0.8 0.3 0.0 0.0 0.0
	文化時間	新聞 読書 テレビ スポーツ 勝負ごと 稽古趣味 見物行楽 その他	0.4 0.1 1.4 0.1 0.0 0.4 0.0 0.3	0.3 0.1 1.7 0.0 0.1 0.0 0.2 0.1	0.4 0.1 1.5 0.0 0.1 0.1 0.0 0.3	0.8 0.6 1.4 0.1 0.1 0.2 0.0 0.3	0.2 0.2 1.8 0.1 0.0 0.5 0.2 0.1	0.3 0.1 1.6 0.0 0.0 0.2 0.1 0.0	0.2 0.1 1.4 0.1 0.0 0.2 0.0 0.5	0.4 0.1 1.5 0.1 0.0 0.4 0.0 0.3

注1) 生活時間調査による。

間の長さは家畜の飼養管理労働に、粗飼料生産のための圃場作業が加わるという、土地利用型酪農の労働過程の特徴から生じている。また、混同経営が生活時間構成で、畑専・酪農の中間形態を示すのは、商品畑作の規模が畑専より小さく、家畜飼養規模は酪農より小さいという農業経営の構造的特徴が、圃場作業・家畜管理時間

の上に反映してのことであることも、表1より読み取られる。なお、ここで注目されるのは経営管理時間¹²⁾の差である。無畜経営の畑専と有畜経営2形態の差は歴然としており、複雑な経営構造を持ち経営管理の必要の要がより強い有畜経営において、経営管理に費やせる時間が短いということは、経営管理の時間的裏付けという面で、一つの問題を提示しよう。

社会文化時間の総量の長い畑専では社会的時間、文化的時間ともに、他の2形態よりも多く、文化的時間の中でも稽古・趣味などの時間が持てている。混同と酪農では労働時間の長い酪農の社会的時間が短く、社会的な生活行動のための時間がほとんど無くなっている。社会文化時間のなかで最も多いのは、各形態を通じてテレビ視聴時間で、特に文化的時間の少ない酪農の集中が著しい。ここでのテレビ視聴時間は単独行為としてもものに限っているので、実際の視聴時間はもっと長い。このように、テレビ視聴が圧倒的な比重を占めるという点に、文化的生活行動における一つの特徴が見いだせる。

非農家世帯の生活時間構成の特徴は、農家世帯に比べて生理的時間が短いことである。しかし、非農家世帯は生理的時間は短いものの、睡眠時間は比較的長く、8時間以上の睡眠が確保され、身の回りの時間が短いところに特徴がある。非農家世帯の身の回りの時間が短いのは、休憩時間が少ないためで、農家生活の特徴として、労働の間の休憩の多さを指摘できる。

(2) 農家と非農家の生活時間構成差

非農家世帯の労働時間は中程度で、家事を除けば7.9時間となり、ほぼ8時間労働の水準にある。その中には農業労働がわずかではあるが含まれている。

社会文化時間は畑専よりは少ないが、有畜経営よりは多い。その内容は、文化時間の割合が農業世帯よりも多く、非農家世帯は交際や地域行事などの社会的な生活行動が少なく、逆に農家は多いという違いがあることが示される。文化的時間の内容では、農家がテレビ視聴に集中するのに対して、非農家のテレビ視聴割合は低く、読書など他の文化的生活行動に分散がみられる。しかし、農家世帯・非農家世帯ともに行楽・見物やスポーツ時間が少なく、これが農村生活の特徴を表している。

2) 女子の生活時間構成

(1) 農業経営形態による生活時間構成差

女子についても農業経営形態別には、男子と同じ様な傾向がみられる。男子と異なっている点を中心に分析していこう。

まず図1をみると、生理的時間は3形態ともに差がない。加えて男子に比べて労働時間の形態間差が小さいことから、大分類による生活時間構成の農業経営形態間

表2 家事の構成（女子）（単位：時間）

	畑専	混同	酪農	非農家
家事・育児	3.3	4.1	3.3	4.4
買い物	0.2	0.1	0.2	0.3
自給	0.2	0.4	0.5	0.0
住宅・環境	0.3	0.2	0.4	0.1
家庭管理	0.1	0.1	0.0	0.0
看護	0.0	0.1	0.1	0.3
送迎	0.1	0.0	0.0	0.0

注1) 生活時間調査による。

の違いは小さくなっており、混同と酪農の違いはほとんどないといっ

よい。
生理的時間の中では、表1をみると男子と同じように労働時間の多い混同・酪農で睡眠時間が少なく、休憩時間が多くなっている。睡眠時間は全ての形態で8時間を切り、女子では家事を含めた労働の過重が大きいことを示している。

労働時間は、どの形態でも男子より長い、特に農業労働時間の短い畑専では、2時間以上の差になっている。表1からその男女差の要因は、各形態の農業労働の長さとは無関係に4時間半から5時間程度になっている家事労働にあるとみられるこの家事労働の長さが、女子の農業経営形態による生活時間構成の違いを小さくしているのである。また表2のように、家事労働は労働時間のみでなくその内容にも、経営形態での大差はみられない。しかし、女子の労働時間の長さを決定し、農業経営形態差を特徴づけるのは、やはり、男子と同じように農業労働である。特に酪農女子の農業労働は家畜管理への集中が大きく、男子より経営形態の差を強く反映している。また男子では有畜経営で少なかった経営管理時間が、女子では酪農で多くなっていることが注目される。つまり、男子（経営主ないしは後継者）がやりきれない経営管理労働を、女子（主婦）が補っているとみられるからである。

社会文化時間は畑専・混同では男子より少なく、酪農では男子と同じ水準であるが、社会的時間は男女の違いが大きく、農家世帯では男子が社会的生活行動の中心であることが読み取られる。文化的時間は男子同様、テレビ視聴時間が多くなっているが、男子よりも稽古・趣味などの時間が多くなっている。

(2) 農家と非農家の生活時間構成差

非農家世帯と農家世帯の生理的時間の差はないが、男子と同じように、非農家世帯では睡眠が多く、休憩が少なくなっている。

労働時間では、農家世帯よりも家事が多く、また農家の農外労働よりも非農家の農業労働の方が多くなっている。非農家の農業労働の内容は、圃場作業と屋内作業

であり、農業臨時雇であることを示していて、農村地域の勤労者世帯の特徴が強く表れている。

社会文化時間では男子よりも、社会的時間の農家世帯と非農家世帯の違いは少ないが、これは農家世帯・非農家世帯ともに女子の社会的生活行動が少ないことを反映している。文化的時間内容では、農家世帯と非農家世帯の差は生じてはいない。

(3) 生活時間構成の特徴と問題点

以上の生活時間構成の検討で明らかになったことは、農業経営形態別にいえば、労働時間量の差が生活時間構成の違いをもたらしており、農業労働に反映する農業経営形態の構造的特徴が、農業経営形態ごとの生活時間の特徴をもたらすということであった。

男女別では、女子の家事労働負担が大きく、農業労働とあわせて「長時間労働」実態にあり、標準といわれる8時間の睡眠時間は年間を通じて確保されないということである。男子でも酪農では、農業労働時間が9時間近くに及ぶために、8時間睡眠が確保されずにいる。こうした、女子、酪農の労働過重状態は健康面に大きな問題をもたらしている。もう一度、表1に立ち返ってみると、就床時間中の療養時間は農業世帯の女子と酪農男子のみにみられ、しかも労働時間の長い酪農の療養時間が長くなっている。このような実態からすると、酪農では綿密な健康管理が求められているのに対し、われわれが並行して行った健康についての調査によれば、時間的余裕がなく、逆に健康診断の受診率が低くなっているのである¹³⁾。

文化的側面についていえば、文化的時間の少ない混同・酪農経営では、そのほとんどがテレビ視聴に向けられている。非農家を上回る時間的裏付けをもっている畑専でも、その内容は同様で、文化的時間の伸びの大半がテレビ視聴時間の増大につながっている、という観すらある。非農家世帯は農家世帯よりもテレビへの集中は小さいものの、農家と同じように行楽・見物、スポーツなどの時間がきわめて小さく、この地域の特徴となっている。これは、地域における文化的活動領域の狭さを示すものであろう。

3. 生活時間構成の季節変動

前節では、農業経営形態ごとの生活時間の違いを年間平均の生活時間構成において把握した。次に、農業労働の季節性に基づいて起こる生活時間の季節的な変動の違いから、農業経営形態の生活行動の違いを検討しよう。

1) 生活時間の変動性と相互関係

(1) 生活時間の変動性

表 3 - 1 月別の生活時間構成 (畑専・混同)

(単位: 時間)

月		生理的生活			労働・家事				社会文化		
		計	就床	身の回り	計	農業	家事	農外	計	社会	文化
畑	男子	12.1	9.4	2.7	4.5	2.3	1.2	0.9	7.5	2.3	5.2
	1	12.5	9.5	3.0	3.6	2.5	0.3	0.9	7.9	3.2	4.7
	2	12.3	9.0	3.3	5.0	3.4	0.5	1.1	6.8	2.3	4.5
	3	12.4	9.8	2.5	3.7	3.2	0.5	0.0	8.0	3.4	4.6
	4	11.3	8.2	3.1	7.1	6.5	0.7	0.0	5.6	2.6	3.0
	5	10.4	7.8	2.7	8.4	8.0	0.3	0.1	5.1	2.9	2.3
	6	11.7	8.5	3.2	10.1	8.5	1.2	0.4	2.1	0.1	2.0
	7	10.5	8.0	2.5	9.9	7.5	0.1	2.3	3.6	0.2	3.5
	8	11.3	7.9	3.3	9.7	8.9	0.4	0.4	3.0	0.8	2.3
	9	11.3	8.0	3.3	9.7	9.3	0.5	0.0	3.0	0.5	2.5
	10	11.8	8.9	2.8	6.9	5.4	0.8	0.7	5.3	0.5	4.8
	11	12.0	9.6	2.5	4.3	2.0	0.8	1.6	7.6	0.5	5.5
	12										
専	女子	10.6	8.2	2.3	6.9	3.1	2.7	1.1	6.5	1.7	4.8
	1	12.3	9.6	2.7	5.7	1.1	3.8	0.8	6.0	1.5	4.5
	2	11.7	8.2	3.4	6.5	2.0	3.2	1.3	5.9	1.4	4.5
	3	10.7	8.1	2.6	8.5	2.1	5.4	1.0	4.8	2.1	2.6
	4	11.3	8.0	3.3	9.2	4.4	4.8	0.0	3.5	1.9	1.6
	5	10.2	7.6	2.6	9.6	4.1	5.2	0.3	4.2	0.8	3.4
	6	10.5	7.8	2.7	10.9	6.0	4.6	0.3	2.6	0.9	1.7
	7	10.8	7.7	3.1	10.4	3.3	5.2	1.9	2.8	0.3	2.5
	8	10.9	7.5	3.4	10.5	5.5	4.1	1.0	2.6	0.7	1.9
	9	10.7	7.8	2.9	11.7	7.2	3.8	0.8	1.6	0.2	1.4
	10	12.0	8.8	3.1	7.5	2.6	4.9	0.0	4.5	0.9	3.7
	11	10.9	8.5	2.5	6.6	0.4	4.9	1.2	6.5	1.3	5.2
	12										
混	男子	12.1	9.7	2.4	6.7	3.8	0.9	1.9	5.3	1.0	4.3
	1	13.0	6.3	6.8	7.9	2.5	0.5	4.9	3.0	0.7	2.4
	2	12.1	8.4	3.7	8.5	7.0	0.2	1.3	3.5	1.1	2.4
	3	11.0	7.9	3.2	6.5	5.6	0.2	0.8	6.4	3.3	3.1
	4	11.9	8.3	3.6	10.4	9.0	0.7	0.8	1.7	1.0	0.8
	5	11.3	7.6	3.8	10.0	8.9	1.1	0.0	2.7	1.5	1.2
	6	10.9	7.1	3.8	5.7	4.8	0.9	0.0	7.4	6.2	1.3
	7	11.8	8.0	3.8	10.0	9.3	0.8	0.0	2.2	0.6	1.6
	8	13.8	7.2	6.6	8.5	8.5	0.0	0.0	1.7	0.3	1.4
	9	10.4	7.5	2.9	10.7	9.9	0.8	0.0	2.9	1.6	1.3
	10	11.4	8.5	2.9	8.7	7.6	0.6	0.5	3.8	0.0	3.8
	11	11.2	8.0	3.2	6.8	5.0	0.8	1.0	5.8	1.1	4.7
	12										
同	女子	10.8	8.4	2.4	6.9	2.9	3.9	0.0	6.3	1.8	4.5
	1	12.6	8.9	3.7	7.1	3.7	3.4	0.0	4.3	0.9	3.4
	2	10.9	7.7	3.2	9.7	4.8	4.5	0.4	3.4	0.9	2.5
	3	12.9	8.6	4.2	7.5	3.1	4.4	0.0	3.7	1.4	2.3
	4	9.7	6.9	2.9	13.2	6.2	7.0	0.0	1.1	0.0	1.1
	5	9.8	7.3	2.5	11.7	5.1	6.6	0.0	2.5	1.8	0.7
	6	10.1	7.5	2.6	12.2	7.1	5.1	0.0	1.8	0.0	1.8
	7	10.6	7.5	3.1	10.8	5.7	5.0	0.0	2.6	0.7	1.9
	8	11.8	8.3	3.5	9.5	5.4	4.1	0.0	2.7	0.1	2.6
	9	10.9	7.8	3.1	12.3	7.8	4.5	0.0	0.9	0.0	0.9
	10	10.9	8.3	2.6	9.4	3.2	5.5	0.6	3.7	0.8	2.9
	11	11.5	7.7	3.8	8.0	4.1	3.2	0.7	4.4	1.4	3.0
	12										

1) 生活時間調査による

表3-2 月別の生活時間構成(酪農・非農家)

(単位:時間)

	月	生理的生活			労働・家事				社会文化					
		計	就床	身の回り	計	農業	家事	農外	計	社会	文化			
酪	男子	1	12.6	8.4	4.2	6.5	6.0	0.0	0.4	5.0	1.2	3.8		
		2	12.7	9.4	3.3	8.9	8.8	0.0	0.1	2.4	0.7	1.7		
		4	13.1	8.6	4.5	8.5	7.3	0.3	0.9	2.5	0.9	1.6		
		6	10.8	8.3	2.5	11.5	11.5	0.0	0.0	1.8	0.0	1.8		
		7	11.0	7.7	3.3	10.5	10.0	0.0	0.5	2.5	0.0	2.5		
		8	9.7	7.3	2.4	11.8	11.8	0.0	0.1	2.5	0.6	1.9		
		9	11.2	7.4	3.8	10.4	10.2	0.0	0.3	2.4	0.0	2.4		
		10	11.6	7.3	4.4	9.5	9.3	0.0	0.2	2.9	0.4	2.4		
		11	11.8	8.4	3.3	8.0	7.0	0.0	1.0	4.3	0.8	3.4		
		12	13.0	8.8	4.2	6.9	6.6	0.0	0.3	4.1	0.6	3.5		
		農	女子	1	11.0	8.0	3.0	8.0	5.1	2.9	0.0	5.0	1.7	3.3
				2	11.1	7.9	3.2	9.2	5.2	4.0	0.0	3.6	1.2	2.4
4	11.7			8.6	3.0	9.6	4.3	5.0	0.3	2.8	0.0	2.8		
6	10.7			7.6	3.2	11.7	5.4	4.7	1.6	1.6	0.0	1.6		
7	10.3			7.6	2.7	11.3	4.8	6.5	0.0	2.4	0.0	2.4		
8	10.0			7.2	2.9	12.0	6.1	5.9	0.0	2.0	0.2	1.9		
9	12.0			7.4	4.6	10.6	7.0	3.6	0.0	1.4	0.1	1.3		
11	12.2			9.5	2.7	8.1	5.8	2.3	0.0	3.8	0.0	3.8		
12	11.0			7.8	3.2	9.1	3.9	5.2	0.0	3.8	1.0	2.8		
非農	男子			1	11.2	8.5	2.7	9.4	0.0	0.2	9.3	3.5	0.8	2.7
				2	10.4	8.3	2.1	8.9	0.0	0.0	8.9	4.8	0.8	4.0
				3	13.8	10.5	3.3	5.4	0.0	0.4	5.0	4.8	1.2	3.6
		4	12.3	8.7	3.6	7.6	0.0	1.9	7.0	4.2	0.0	4.2		
		6	11.2	8.8	2.4	8.4	0.4	0.0	6.5	4.4	1.4	3.1		
		7	11.8	9.8	2.0	8.8	0.0	1.8	8.8	3.5	0.0	3.5		
		8	8.4	6.9	1.4	6.4	0.0	0.0	4.6	9.3	4.6	4.6		
		9	10.7	8.2	2.5	9.0	2.0	0.5	7.0	4.3	1.1	3.2		
		10	10.9	8.0	2.9	8.8	0.0	0.5	8.3	4.4	0.9	3.5		
		11	10.9	8.5	2.5	8.6	0.0	0.2	8.0	4.5	1.4	3.1		
		12	10.5	8.3	2.2	8.8	0.4	0.2	8.2	4.8	1.0	3.9		
		家	女子	1	10.8	7.8	3.0	7.6	0.0	5.9	1.7	5.7	0.0	5.7
2	11.8			9.1	2.7	7.6	0.0	5.6	2.0	4.6	0.0	4.6		
3	11.8			8.9	2.9	8.6	0.0	6.9	1.7	3.7	0.7	3.0		
4	11.6			8.5	3.1	8.8	0.0	4.8	4.0	3.6	0.5	3.1		
6	10.4			8.8	1.7	10.4	2.3	3.5	4.6	3.2	1.5	1.7		
7	11.0			5.5	5.5	8.5	0.0	8.5	0.0	4.5	2.5	2.0		
8	9.9			8.2	1.7	10.8	2.1	2.0	6.7	3.3	1.1	2.2		
9	11.6			7.1	4.5	9.3	0.0	4.7	4.6	3.1	1.0	2.1		
10	10.8			7.8	3.0	12.0	8.0	4.0	0.0	1.3	0.0	1.3		
11	11.3			7.8	3.6	10.1	0.0	7.3	2.8	2.7	0.4	2.3		
12	11.2			8.4	2.8	9.4	0.0	4.2	5.2	3.4	0.5	2.9		

注1) 生活時間調査による

まず、生活を構成している各時間がどの程度の変動性を持つか、表3-1、2をもとに、月ごとの変動変動係数を求め確認しておこう(表4)。変動係数の大きければその生活行動には季節性が大きいと理解されるからである。

農業経営形態、男女ともに、変動係数の大きさの生活時間ごとの傾向は共通して

表4 生活時間の変動係数

		男 子				女 子			
		畑専	混同	酪農	非農家	畑専	混同	酪農	非農家
大分類	生理的生活	0.06	0.08	0.09	0.11	0.05	0.09	0.06	0.05
	家事・労働	0.36	0.19	0.19	0.15	0.22	0.21	0.14	0.14
	社会文化	0.37	0.47	0.33	0.31	0.37	0.47	0.39	0.31
中分類	生理的 就 床	0.08	0.10	0.08	0.10	0.07	0.07	0.09	0.12
	生活 身の回り	0.11	0.34	0.20	0.23	0.12	0.17	0.18	0.34
	労働 農業労働	0.48	0.34	0.22	2.25	0.56	0.31	0.17	2.07
	・ 農外労働	0.98	1.43	3.00	0.20	0.69	1.80	2.36	0.69
	家事 家事	0.57	0.52	0.86	1.25	0.19	0.23	0.29	0.34
	社会 社会的	0.68	1.06	0.76	0.99	0.52	0.81	1.36	0.96
類	文化 文化的	0.33	0.54	0.31	0.15	0.42	0.46	0.30	0.45

注1) 月ごとの各生活時間の変動係数である。

いる。生理的時間は変動が小さく、労働時間と社会文化時間の変動が大きい。このことは、労働時間量の増減によって社会文化時間が変動することを示唆する。社会文化時間の中では、社会的時間の変動が文化的時間よりも大きく、季節性が強い。また、非農家世帯の農業労働の変動係数の高さは季節的・臨時的な労働であることを示している。これは、農家世帯の農外労働についても同様である。

変動係数大きさでは、非農家世帯は農家世帯よりは小さく季節的な生活時間の変化は小さくなっている。

農業経営形態別にみると、農業労働は、畑専のように労働時間の短い農業経営形態ほど変動が大きく、社会文化時間では有畜経営の方が変動が大きくなっている。

(2)生活時間の相互関係

前節の分析では、農業経営形態別にみたときの生活時間構成の差異は、労働時間なかんずく農業労働時間の差によるものとみられた。しかし、変動係数に現れた季節的変動の違いは、全ての時間が農業労働に規定されて変動するわけではなく、変化の小さな基礎的な生活行動と、労働時間の変化に大きく影響される生活行動があることを示唆する。そこで、農業労働の季節性がどのような生活行動に影響するかを検討しよう。

表5は、構成時間の間の相関係数を表3-1、2から求めたものである。

農家世帯に共通する傾向として、労働時間と社会文化時間の相関が高く、労働時間の増減が社会文化時間の増減につながっていることが確認される。労働時間と農業労働時間の相関は、酪農女子を除き相関が高いので、農業労働時間が社会文化時間を規定していると理解される。社会文化時間の中では、労働時間との相関をもつのは畑専男子と女子の文化的時間で、社会的時間は畑専男子が弱い相関をもつだけである。このように社会的時間が労働時間とパラレルな関係にはないのは、農村における社会的生活行動が労働時間以上に強い季節性をもつためである。表3-1、2にみられるように、社会的時間は作物の生育管理の必要のない、冬期農閑期に集

表5 生活構成時間間の相関係数

(単位：時間)

相関を見た時間		畑専	混同	酪農	非農家	
男	総労働	生理的	*0.621	0.000	**0.750	0.070
		社会文化	**0.960	**0.764	*0.720	0.295
		就床	**0.805	0.001	0.343	0.065
		身の回り	0.130	0.000	0.503	0.036
子	総労働	社会文化	*0.611	0.306	0.537	0.226
		文化	**0.747	0.304	0.515	0.220
		生理的	0.422	0.236	0.221	0.427
		社会文化	0.171	0.047	0.152	0.191
女	総労働	総労働家	**0.931	*0.680	**0.969	**0.750
		家事	0.040	0.000	0.382	0.387
		就床	0.143	*0.557	0.015	0.229
		身の回り	0.049	0.221	0.012	0.099
子	総労働	社会文化	0.389	0.610	0.376	0.270
		文化	**0.913	**0.833	*0.766	*0.760
		就床	*0.648	**0.711	0.515	0.001
		身の回り	0.049	0.221	0.012	0.099
子	総労働	社会文化	0.362	0.388	0.347	0.000
		文化	**0.811	**0.765	*0.701	0.593
		生理的	0.134	0.210	0.024	0.018
		社会文化	0.171	0.178	0.138	0.244
子	総労働	総労働家	**0.801	**0.754	0.082	0.085
		家事	0.004	0.125	0.122	0.333
		就床	0.143	0.195	0.140	0.071
		身の回り	0.143	0.195	0.140	0.071
子	総労働	社会文化	0.171	0.178	0.138	0.244
		文化	0.171	0.178	0.138	0.244
		生理的	0.134	0.210	0.024	0.018
		社会文化	0.171	0.178	0.138	0.244

注1) 各月の構成時間をサンプルとして行った一次回帰の相関係数である。

2) **は1%水準で有意、*は5%水準で有意。

中している。このように、社会的活動の季節的集中が地域社会のなかでいわば慣行化されており、労働時間以上に強い規定性をもっていると理解される。そのため、混同・酪農男子では、労働時間の長短によって決定された社会文化時間の中で、特定の季節だけ社会的な生活行動が行われるために、文化的時間もまた労働時間との相関をもたないであろう。

農業経営形態別には、労働時間の変動の大きな畑専は、就床時間も労働時間と相関をもつように、労働時間の変化に対応して生活時間構成が変化するという傾向を強く有している。

農家世帯と非農家世帯の違いは、農家世帯では各構成時間間の相関が高く、非農家世帯では低くなっている。農家世帯では労働時間の長さが他の生活時間の長さを決定しているとみられるのに対し、非農家世帯では各時間間の関係は小さく労働時間の長さに関わらず、残りの生理的時間と社会的時間の分配が決定されていると見られる。

労働時間との相関が低く、労働時間と関わりなしに変動しているのは、身の回りの時間、家事、社会的時間などである。家事労働は先の変動の少なさとあわせると、農繁期においても一定量の家事時間が確保されていることを意味するであろう。農繁期に家事の時間が確保できない、といった事態は起こっていないことになるが、その一方で、前節で明らかなように、婦人の労働過重が起きているのである。

以上、畑専男女と混同女子については労働時間の変動が全体の生活時間構成を決定しているとみられる。酪農男女と混同男子については、こうした関係は見られない。農家世帯の生活時間構成の季節変動は、農業労働の変動を軸にしながらも、それだけでは決定されず、地域的に決定される生活行動の影響も強いといえる。

2) 生活時間の季節的類型

(1) 生活時間構成の変動パターン

次に、生活時間構成の変動パターンは、農業経営形態によってどの様に異なるかを検討しよう。

図2-1～3は、大分類による月ごとの生活時間構成を図示したものである。

この図から生活時間構成の月別の変化をみると、畑専男子の場合だと、冬期（12～4月）、春・晩秋期（5、6、11月）、夏秋期（7～10月）と、大きく3つ程度の生活時間構成の類型によって、段階的に変化する季節パターンが確認できる。この季節パターンは、畑作の作業の季節性とほぼ符合するが、春の蒔きつけ時期より

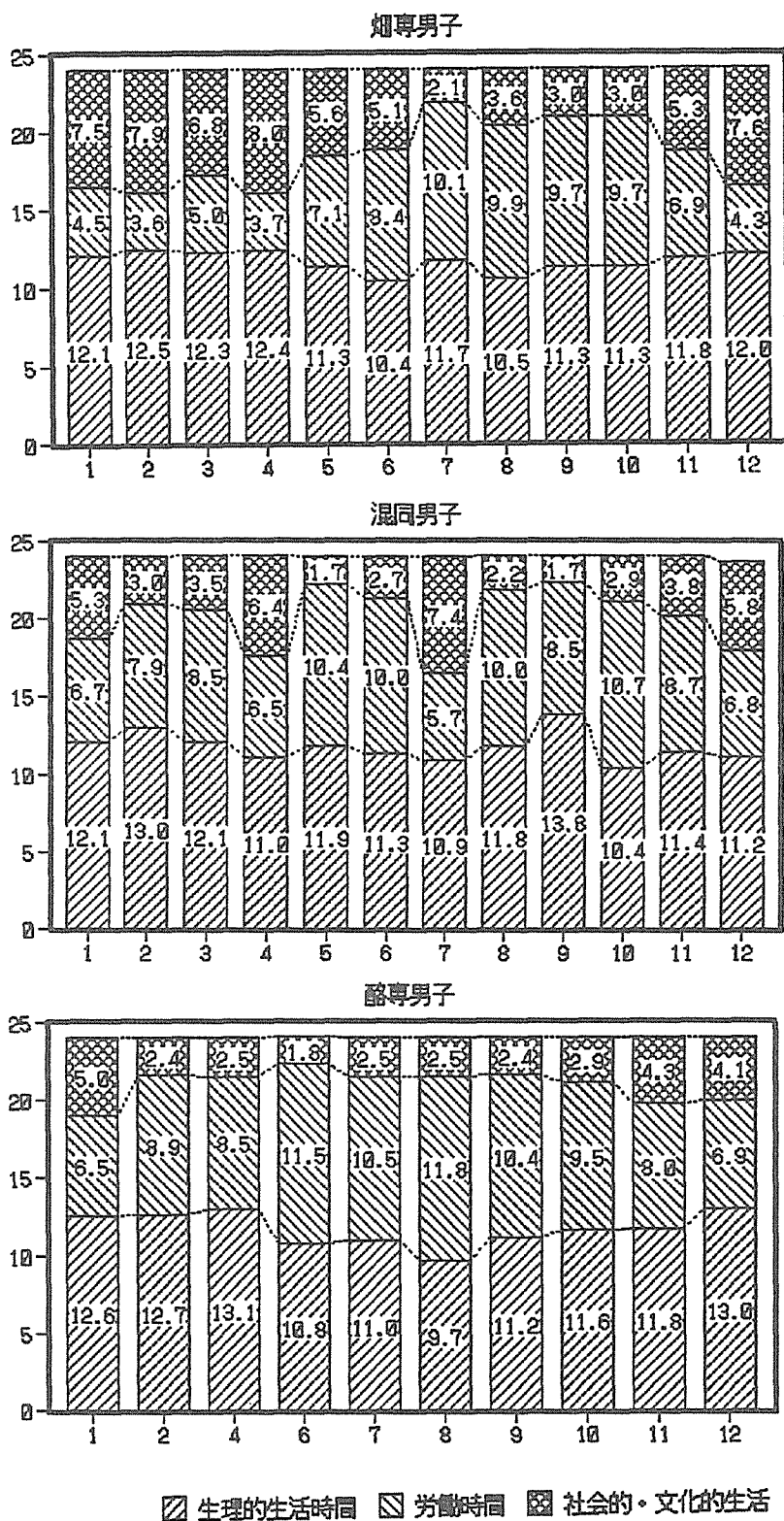
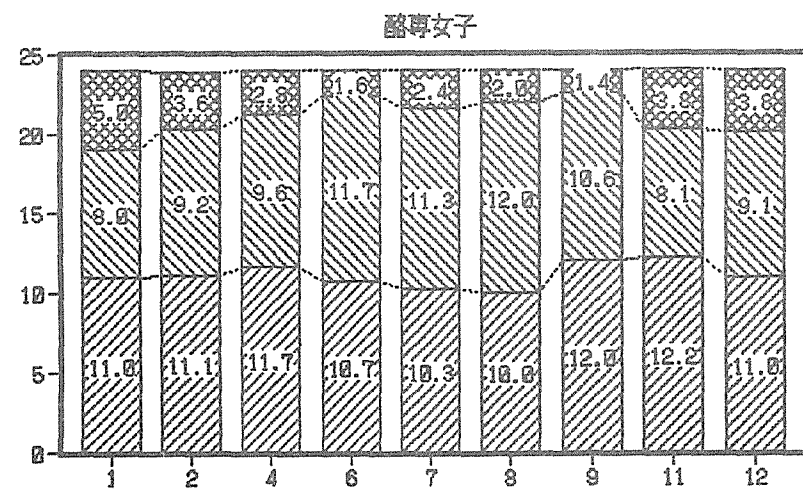
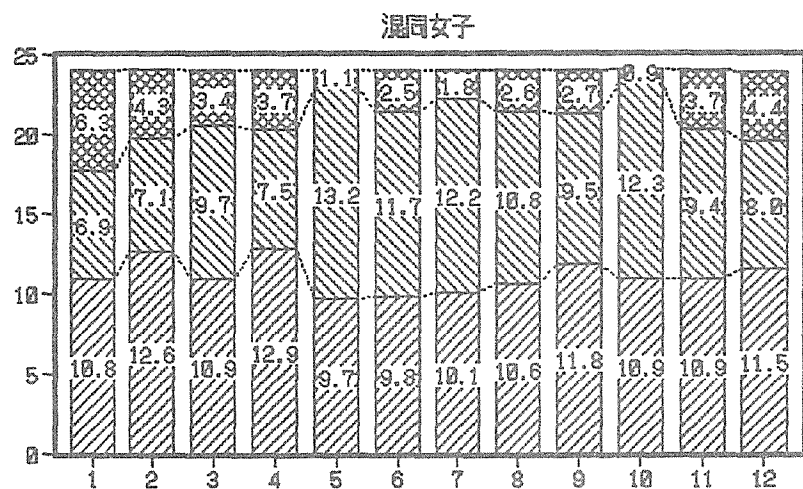
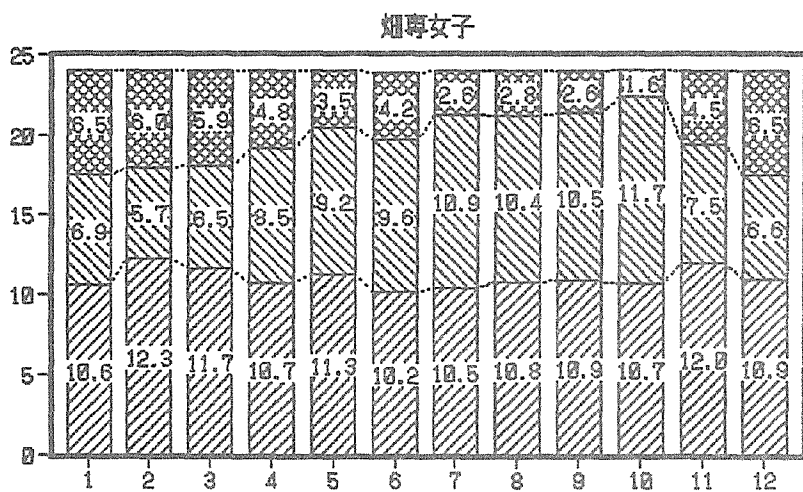
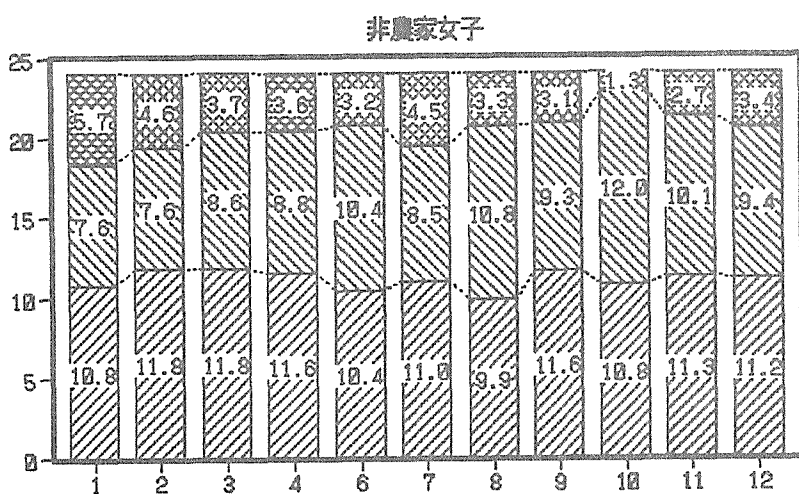
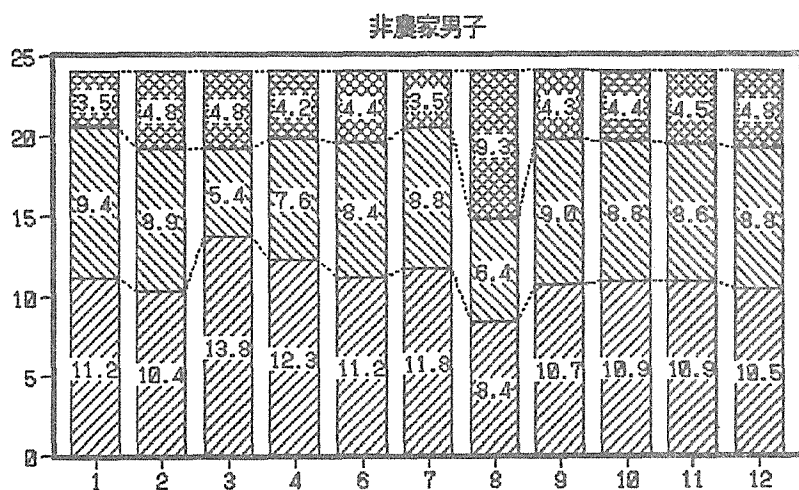


図 2 - 1 生活時間構成の月別変化 (男子)



生理的生活時間
 労働時間
 社会的・文化的生活

図 2-2 生活時間構成の月別変化 (女子)



生理的生活時間

 労働時間

 社会的・文化的生活

図 2 - 3 生活時間構成の月別変化（非農家）

も秋の収穫時期の労働時間が長く、また夏季農閑期と考えられる7月の労働時間が長くなっている点で、必ずしも圃場作業にのみ規定されるものではないようである。

酪農男子では、変化は緩やかで連続的であるが、同じような季節パターンが見られる。連続したパターンを描くのは、先にもみたように、農業労働の過半を季節性の少ない家畜管理労働が占め、冬季間も労働時間がかなり長いことによる。

女子でも、冬季に労働時間が短く、春季－夏季－秋季と増加し冬季にまた減少するという季節パターンが、やはり畑専・酪農で見られる。男子と異なる点は、変動が緩やかで連続的な変化となっており、労働時間量の差を除けば畑専と酪農が同じようなパターンを描くことである。男子に比べ変動が緩やかなのは、労働時間の過半を占める家事労働が、前項でもみたようにきわめて変動が少なく、農業労働の変化に関わりなく一定しているためとみられる。

混同は男女ともに、このような季節パターンが見られず、夏季でも冬季の水準に労働時間が短くなる月がみられる。これは、混同経営の場合、畑作物がてんさい・ばれいしょ・豆類・小麦の基幹4品目のうち、特定の品目特にてんさいや豆類に偏っていることから、畑作作業が特定時期にのみに発生し季節性がより強いためと考えられる。

非農家世帯では、男子には季節的な変動パターンはみられないが、女子には、農家に近い季節パターンが見られるが、これは表3-2のように非農家女子の農業労働（臨時雇）が、農繁期に集中しているためである。

以上のように、農家世帯では季節的な変動が大きいために、農繁期には労働時間は非常に長く、社会文化時間は最低の水準まで短くなり、また生理的時間も短くなっている。畑専男子では、労働時間の増加につれて生理的時間・社会文化時間が減少するという先の相関関係が図からも確認できる。相関の低かった酪農男子の場合では、労働時間が9時間台までは生理的時間は安定していて労働時間の増減には社会文化時間の減増が対応し、10時間以上になると、生理的時間が減少するという関係が図から読み取られる。これは、酪農では労働時間の絶対量が多く、春季に既に社会文化時間の最低水準に達してしまうことによるとと思われる。

さきの表5では明瞭な相関関係が見られない形態があったのは、各時間の相互関係が量的比率だけでなく、その絶対量も関係しているからで、労働時間と他時間の量的関係は時間量が最低水準以上の場合に存在すると理解される。また、労働時間増加による生活時間構成の変化は、畑専のように相関関係が強く各時間が平均的に減

表6 生活時間の月別変化（農家世帯）

（単位：時間）

月	生理的生活			農業労働				家 事			
	睡眠	昼寝	身の 回 り	圃場 作 業	屋内 作 業	家畜 管 理	経営 管 理	家事 育 児	自給	住宅 環 境	
男 子	1	8.8	0.4	0.3	0.0	0.2	1.3	1.5	0.2	0.0	0.3
	2	8.4	0.3	0.6	0.2	0.7	2.6	1.3	0.1	0.0	0.0
	3	8.6	0.1	0.7	0.7	2.5	1.0	0.4	0.2	0.1	0.1
	4	8.5	0.4	0.9	0.2	2.1	1.9	0.6	0.2	0.3	0.0
	5	7.9	0.3	0.7	5.4	0.6	0.8	0.3	0.0	0.0	0.2
	6	7.5	0.2	0.8	5.0	0.8	2.4	0.3	0.2	0.0	0.5
	7	7.8	0.7	0.8	4.4	0.7	1.0	1.8	0.1	0.0	0.8
	8	7.5	0.4	0.7	4.2	0.5	2.5	1.3	0.2	0.0	0.2
	9	7.7	0.0	1.0	4.8	1.6	1.4	1.1	0.0	0.0	0.1
	10	7.8	0.0	1.3	5.3	1.0	2.3	0.8	0.2	0.1	0.1
	11	8.3	0.1	0.6	2.3	0.9	1.2	0.5	0.1	0.1	0.2
	12	8.5	0.2	0.5	0.0	0.7	2.2	1.0	0.1	0.1	0.0
女 子	1	8.1	0.2	0.2	0.0	0.1	1.1	0.1	3.0	0.0	0.0
	2	7.6	0.1	0.6	0.0	0.8	1.5	0.1	3.2	0.0	0.0
	3	11.7	0.1	0.9	0.8	2.4	0.9	0.1	4.8	0.0	0.0
	4	7.9	0.2	0.4	0.0	1.5	1.2	0.2	3.8	0.4	0.4
	5	7.4	0.2	0.6	3.5	0.5	0.8	0.1	3.0	1.4	0.5
	6	7.3	0.2	0.6	2.7	0.1	1.6	0.1	3.6	0.9	1.0
	7	7.4	0.4	0.4	4.4	0.0	0.7	0.9	3.6	0.2	0.5
	8	7.4	0.2	0.6	2.1	0.3	1.8	0.2	3.7	0.7	0.6
	9	7.5	0.1	0.8	4.0	0.6	0.8	0.2	3.2	0.2	0.3
	10	7.4	0.0	0.9	4.2	1.1	0.8	0.1	3.2	0.5	0.2
	11	8.0	0.2	0.4	1.0	0.5	0.8	0.0	3.3	0.2	0.1
	12	7.7	0.2	0.5	0.0	0.3	1.6	0.3	4.0	0.0	0.1

1) 生活時間調査による

2) 農家世帯成人全体の平均である。

少する場合と、酪農のように特定時間から減少する場合もある。後者では、労働時間の増加につれて減少が進む順は、社会的時間、文化的時間、就床時間となっている。身の回りの時間が減らないのは、その中の休憩時間が労働時間の増加に応じて増えるからで、また就床時間は最初は睡眠時間が減り更に労働時間が増えると昼寝が減っている（表6）。

(2) 生活時間の類型

図2-1-2のように、農家世帯の生活時間構成には月ごとの違いがあるが、い

表7 生活時間類型の分布

労働 家事	生理 生活	男 子				女 子			
		畑専	混同	酪農	非 農家	畑専	混同	酪農	非 農家
長	短			6, 8		7-10	5-8 10	6-9	6, 8 10
	中	7	8, 10	7, 9					
中	短	6, 8				4, 6	3, 11		
	中	9 10	5, 6 11	10 11	2, 4-6 7, 9-1	5	9 12	1, 2 4	2, 7, 9 11, 12
	長		9	2 4				11 12	
短	短		7		8	1, 12	1		1
	中	5, 11	4, 12			3			2-4
	長	12-4	1-3	1, 12	3	2, 11	2, 4		

注1) 数字は月を示す

2) 生活時間類型は、「労働家事」時間量と、「生理的生活」時間量の組合による。時間量の区分は下表による。

	長い	中位	短い
生理的時間	12時間以上	11～12時間	11時間以下
労働時間	10時間以上	8～10時間	8時間以下

くつかの類型で年間の生活時間が構成されているようである。そこで、最後に年間の生活時間パターンを構成している生活時間の類型と、農業経営形態ごとの特徴について検討しよう。

生活時間の類型は、表7の注に示すように、生理的時間と労働時間のそれぞれの時間量の組合せで決定した。生活時間の類型は8類型である。

各農業経営形態の年間生活時間の構成をその類型数でみると、農家世帯の場合には5ないし6の生活時間類型で構成され、多様性が強い。これに対し、非農家男子は3類型のみで、しかも10カ月が同一の類型であり、生活時間構成が年間を通じて固定的である。女子の場合も構成類型数は5つであるが、主要3類型に10カ月が入り、男子と同じく生活時間構成の固定性が強い。また、労働時間の長い類型はいずれも農業労働の発生している月であり、純粋な非農家世帯としては女子もまた男子

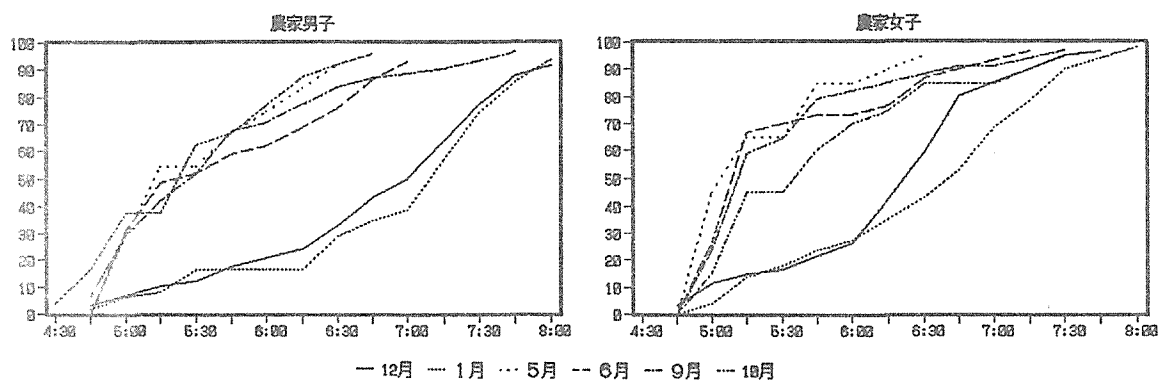


図3 起床時間の季節変化（起きている人の割合）

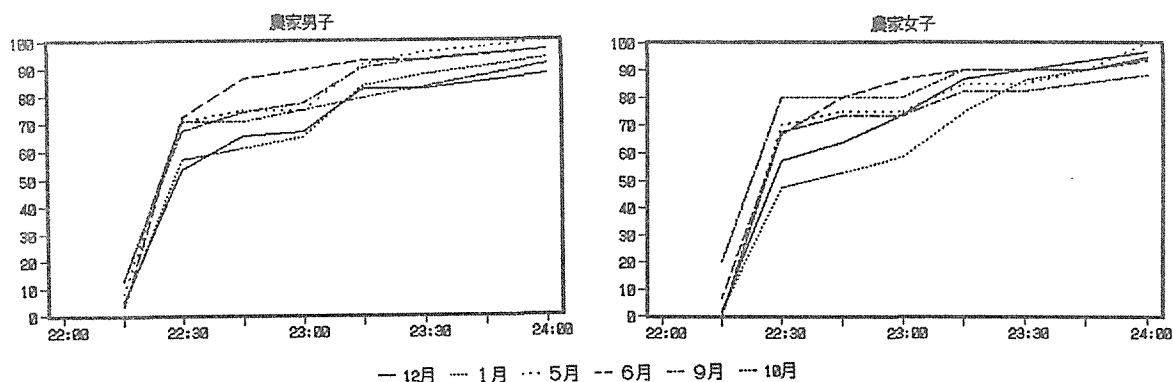


図4 就床時間の季節変化（寝ている人の割合）

と同じような類型構成をとるとみられる。

畑専・混同の男子は冬季は特定の生活時間類型に集中し、酪農男子と女子は夏季に特定の類型に集中しているという違いがみられる。これは、酪農男子と女子は労働時間が長いため、夏季間はすべて労働時間が長く生理的時間が短い類型をとり、農閑期にさまざまな類型をとるのに対し、労働時間が短い畑専・混同男子は逆に冬季に労働時間が短く生理的時間が長い類型に集中するためである。特に、酪農女子には労働時間の短い類型が存在せず、酪農男子でも12・1月の2ヶ月しかなく、酪農の労働過重が類型構成の面からも明かである。このように、同じ経営形態の中では女子は男子よりも労働時間の長い類型が多く、経営形態別には畑専－混同－酪農の順に労働時間の長い類型の構成が多くなっている。

また、同一地域にあっても経営形態によって夏季間の農閑期に違いがあることも、この表から読み取られる。これが、前述のように社会的生活行動が、慣行的に農閑期の共通する冬季に集中する、一つの要因と考えられる。

補. 睡眠時間の季節性

農家の生活行動の特徴として、その「睡眠時間を規制するものが第1には日長時間であって、第2には農業労働時間である」ことが指摘されている¹⁴⁾。図3・4は、調査対象地である大規模畑作地帯ではどうかを、検討するために作成したものである。まず、起床時間は冬季と夏秋季では差があるが、日の出の最も早い6月と秋分の時期の9月との差は認められない。一方、就床時間は年間通じて大きな差はない。このことから、日長時間の睡眠時間の規定性は弱くなっていると考えられる。

しかし、5・6月と9・10月の起床時間がほぼ同じパターンをたどることから、日長時間に即応した形ではないものの、夏秋季と冬季の二つの生活パターンが存在することが理解される。つまり、農家の睡眠時間が夏季農閑期にも減少するのは労働時間の増大によってだけもたらされるのではなく、夏季の生活パターンに基づくものと理解することも可能である。つまり、先の指摘は今回の調査でもある程度は妥当するとしてよいであろう。

したがって、先にみたように夏季農閑期の7月に労働時間が長いのは、「長く起きているので、何等かの仕事をしている結果である」と考えることができる。そこで、表6で農業労働の内容を見ると7月には圃場作業・屋内作業・家畜管理作業の全てが減っていて、経営管理作業が増えており、また家事労働では住宅環境整備が

長くなっている。このように、夏季の労働時間には「夏は早く起きる」という結果「何かしている」という形での労働が含まれている。これは、前述の社会的生活行動のように夏季間には活動領域が著しくせばまるために、生活行動が労働に向けられる結果とも考えらよう。

4. 生活時間からみた農家・農村生活の課題

1) 分析の要約

本稿では、大規模畑作地帯の農家の生活時間構造について経営形態別の差異に注目して分析した。その結果を要約すると、以下の通りである。

①経営形態別では、畑専、混同、酪農の順に労働時間が長く、逆に社会文化時間が短い。それは各農業経営形態の構造的特徴が生活時間構成に表れたものである。男女別では、女子の労働時間が各形態共通して長い。それは女子の家事の多さに起因する。農家世帯の女子と酪農の男子は、年間を通じて長時間労働の状態にある。農家世帯の生活の特徴として、社会的な生活行動が多いことがあげられる。文化的な生活行動の内容は乏しく、テレビ視聴が圧倒的である。

②生活時間の年間の変動は、農家の方が非農家に比べて大きい。それは農業労働の変動が大きい点に由来する。労働時間の変動は他の生活時間を変化させるが、その関係は一律ではなく絶対的時間量にも関連する。

③農家の生活時間構成は季節的な変動パターンをもっているが、そのパターンは畑専男子のような段階的なパターンと、酪農男子の様な連続的なパターンとに分けられる。混同経営は不規則なパターンを画く。

④年間の生活時間構成はいくつかの類型にわけられ、農家では5ないし7の類型からなり多様な類型をとるが、非農家では特定の類型への集中度が高い。

2) 大規模畑作地帯における農家生活の問題点

以上の分析結果から指摘される問題点についてまとめて結びとしよう。

第1は、特に農繁期の長時間労働である。特にこの点是有畜経営と女子に強く現れている。表8は13年前の1975年時点の十勝地方の農家の農繁期（8月～10月）の生活時間構成を示したものである¹⁵⁾。先の表3の同時期と比べると13年間でどの様に農家の生活時間が変化したかを大まかに知ることができる。この間に農繁期にわずかながら労働時間が減り、社会文化時間がわずかに増加したことで、生理的時

間には大きな変化がなかったことがわかる。しかし、全体としてみると変化はごくごくわずかで、この14年間に農業技術・生活技術の面で様々な進歩があったにも関わらず労働軽減にはあまり寄与していないということになる。

表8 1975年の生活時間（農繁期・十勝）
（単位：時間）

	男 子			女 子		
	畑専	混同	酪農	畑専	混同	酪農
生理的時間	10.9	10.3	10.5	10.1	9.6	10.2
うち 睡眠	7.5	7.3	7.2	7.2	7.0	7.0
労働時間	11.3	12.2	12.0	12.6	13.5	12.8
うち 農業労働	11.2	11.8	12.0	10.6	10.9	9.5
家事	0.1	0.4	0.0	2.0	2.5	3.3
社会文化時間	1.8	1.5	1.5	1.4	0.9	1.0

注1）有賀秀子「北海道における酪農経営世帯の生活構造について」（『農村生活研究』第20巻2号）より、

この14年間に農業技術・生活技術の面で様々な進歩があったにも関わらず労働軽減にはあまり寄与していないということになる。同論文では1968年時点での調査データも掲載され

ているが、1968年から1975年にかけても労働時間の軽減は見られなかったとされている。この20年間にほとんど農繁期の労働軽減が図られなかったということになる。

再度、表8と表3にもどって詳しく見てみると、経営形態では畑専、性別では男子の労働時間の減少が大きくなっている。つまり、有畜経営の特にその女子は1年間を通じて労働時間が多く、農繁期には荷重な労働状態に現在でもあり、それはこの10ないし20年間改善されてこなかったことを意味する。また、労働時間が最も少ない畑専でも、その労働時間の季節変動が非常に大きく、農繁期の労働時間ピークは他の形態よりも低いものの、1日10時間近い労働が4カ月以上にわたって恒常化しているのである。こうした年間通したあるいは農繁期の長時間労働問題の解消は、家族労働力の再生産という視点から、農業経営の質的改善を考えるときの重要なポイントとなるであろう。

第2の問題点は、地域的な農村生活のまとまりについてである。この二つの表の比較からもわかるように、経営形態間の生活時間構成の差が農繁期でも広がってきており、農閑期の畑専と有畜経営の生活時間にいたっては全くことなる地域・産業ではないかと思われるほどの差が出ている。また、季節的な変動パターンも経営形態によって大きく異なっている。このことは、酪農男女・混同女子で社会的時間が農閑期でも少なく、農繁期には殆どない、という違いに鮮明に現れている。この経営形態による社会文化時間の差は、例えば地域的に何か取り組もうとするような時に、有畜経営はなかなか取り組めないという、経営形態間の溝ができることを意味し、農村生活におけるまとまりの脆弱さに結びつくものである。

第3には、文化的生活行動の内容や、夏季農閑期の生活行動の労働への傾斜にみられる、活動領域の問題である。豊かな内容をもつ生活を実現するためには、その生活行動の「場」が必要とされるが、そうした「場」が欠落しては、農村生活の活性化なり、農業という産業に立脚した固有の「農村文化」を創造する展望は開けないであろう。

付記

本文中でも述べたように、この生活構造に関する調査は北海道大学農業経営学教室が共同研究として、進めているものである。本稿はその第1報として、1990年度日本農業経済学会大会個別報告会で報告したものを、代表報告者である松木の責任において取りまとめたものである。

注

- 1) 七戸長生著『日本農業の経営問題』、北海道大学図書刊行会、1988年、123頁
- 2) 児島賀典「農業経営問題と農村生活問題の結節」（児島賀典、君塚正義共編著『農村生活の現代的課題』、明文書房、1975年）、225頁
- 3) 児島賀典「農業経営・生活のむすびつきとむらづくりのありかた」、（日本農村生活研究会西日本支部編『農家生活と生産の再結合－農村の高令化・婦人化と普及活動』、明文書房）、1～20頁
- 4) 生活実態調査は、生活時間調査のほか、①「生活理念」と「経営理念」に関する調査、②生活における農家間のつながりに関する調査、③自給食品に関する調査、④村落行事の参加に関する調査、⑤労働災害および健康に関する調査、からなっている。
- 5) 森川辰夫『農村生活の構造－農家生活リズム論的分析』
- 6) 農家世帯と非農家世帯の生活時間構成の違いを、同一地域内で把握することは従来行われてこなかった。それは農業生産に由来する農家の農繁期と農閑期という季節パターンの存在が、非農家世帯との違いとして強調されてきたためである。農家世帯と非農家世帯の生活時間構成の違いを調査したものとしては、NHK生活時間調査があるが、都市勤労世帯との比較であって同一地域内での比較ではなく、また調査日が秋のみでありしかも全国調査であることから、農繁期あるいは

農閑期の違いが不明瞭になってしまっている、という問題をもっていた。非農業世帯員もまた、農村の一員であり、今後の農村生活のあり方を考える場合には、生活主体の一員として視野に入れる必要がある。

- 7) 中札内村は、全村法人化運動で知られ、現在11の共同経営法人があるが、いずれも酪農・養豚・養鶏（採卵）の畜産を主とする経営体である。社員である構成員は交代制で勤務しており、その生活は家族経営と異なると考えられる。共同経営法人構成世帯をも対象としたのは、企業形態による違いを調査するためである。
- 8) 「生活リズム」論を提起する森川は、過去の生活時間調査方法の検討から、周年調査が望ましく、簡易調査法として時期ごとに7日から10日の調査を行うべきであるとしている（森川辰夫「農家生活時間分析の課題と方法」、児島賀典、君塚正義共編著、前掲書、162～164頁）。この説は、現在、生活時間調査方法として広く受け入れられているようである。われわれが隔月1日という調査方法を取った理由は、調査対象戸数が従来の調査に比べて極めて多く、しかも経時調査であることから、調査者ならびに調査対象者の負担を軽くするためである。また、大量調査であるため類型ごとに集計することによって、個別的なふれは解消されたと考えた。同様の調査方法としては、新潟農試による主婦労働に関するものがある（新潟県農業試験場「近代化にともなう農村婦人労働の質的解明 第1報」、新潟県農業試験場研究資料 No51）。
- 9) NHK放送世論調査所『日本人の生活時間1970』、日本放送出版会、1971年
- 10) 生活時間の分類については、NHK「国民時間調査」（NHK放送世論調査所前掲書、353～354頁）のほか、森川辰夫（森川前掲『農村生活の構造』、86～87頁）の分類法などを参考にした。生活時間分類の問題については、森川前掲書第3章のほか杉山茂「生活時間」（農林水産技術会議事務局編『農林水産研究文献解題No13 農家・農村生活編』、農林統計協会、1987年、55頁）に詳しい。
- 11) 井上和衛著『農業「近代化」と農民』、労働科学研究所、1984年、141頁
- 12) 付表にあるように経営管理には、農協（部会）の会合や研修等を含んでいる。こうした行動を農業労働に含むかどうかについては異論があり、井上和衛は農事研究会なども間接労働に含む分類を示している（井上「農民の生活時間構造」、藤本外共編著『日本の生活時間』、労働科学研究所、1965年）が、森川はそれに対し「これらは、生活時間における分類としては広義の社会的活動の時間に含めるべきである」（森川前掲『農村生活の構造』、92頁）と批判している。われわ

れの分類では、工場や選果場の操業に合わせて農産物の出荷日が決定されるというように、高度に地域農業のシステム化が進み、これらの問題を取り扱う部会への出席が個別の経営の意志決定にとって必要不可欠になっている、という実態から農業労働の一部と見なすことにした。

- 13) 中札内村北海道畑作経営技術研究所「ライフ・インダストリーへの道（第2報）－新しい畑作文化の創造－」所報第28号、1989年
- 14) 森川前掲『農村生活の構造』、78頁
- 15) 有賀秀子「北海道における酪農世帯の生活構造について」（『農村生活研究』第20巻第2号）

経営主との続柄	
---------	--

満年齢	
-----	--

記入者	1. 本人	2. 他の家族（該当に○）
-----	-------	---------------

調査対象者と記入者が違う場合の理由 1、他出中（下宿・入院など家計は一緒だが別居の場合）
（記入者が2の場合） 2、病気療養中 3、その他（ ）

例を見ながら、今日1日の生活時間を記入して下さい（欄の1目盛りは15分ですが線は無視して記入しても結構です）

午前	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
記入例					すいみん		洗顔	炊事	朝食	お風呂	洗濯	中学校へ	帰宅	昼食

午前	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
記入欄													
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	

午後	1	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	0			
記入例	帰宅	昼食	昼寝	畑へ		洗濯	帰宅	休けい	搾乳	給餌	入浴	食事	テレビ	伝書整理	読書	テレビ	すいみん

午後	1	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	0
記入欄														
	1	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	0

付図 生活時間調査表（個人記入用）

付表1 生活時間分類表

大分類	中分類	小分類	具体的内容
	項目	項目	
生理的生活時間	就床時間	睡眠 昼寝 仮眠 療養	
	生理的時間	食事 身のまわりの時間 休憩 受診・検診 通院の移動	朝食、昼食、夕食、おやつ 入浴、洗顔、着替え、身じたく 農作業中の休憩、食後その他の休憩 検診時間 病院への移動時間
労働時間	農業労働時間	圃場作業 屋内作業 家畜管理作業 経営管理作業 移動	芋掘り、ビート掘り、豆積み・脱穀、秋耕し 作業準備、機械整備、納屋・作業舎での作業 搾乳、給餌、清掃、出荷、畜舎への移動時間 簿記記帳、農業関係会合、生産資材の買物、研修 圃場・畜舎への移動
	農外労働時間	勤務 通勤	勤務、休憩 通勤
	家事・育児	家事・育児一般 買物 自給 移動 住居環境整備	炊事、洗濯、風呂炊き、掃除、育児 生活用品の買物 自給畑の作業、家庭内食品加工、漬物作り 買物に要する移動 家の周りの掃除、花壇の手入れ
	就学時間	学校 自宅学習 通学	授業、学校行事、課外活動 自宅学習 通学時間
社会文化時間	社会的時間	社会的活動 個人的交際 移動	部落の会合、学校関係会合、生協関係 来客応対、訪問外出、冠婚葬祭 交際に関する移動
	文化的時間	新聞 読書 テレビ ラジオ スポーツ 勝負ごと 稽古ごと・趣味 見物・行楽 子どもの遊び その他	雑誌、単行本 パチンコ、麻雀、競馬